
敷島の青い車その3

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

くどうようだが某自動車メーカー・開発部門に属する若き俊英・敷島は、開発部長室に駆け込んだ。

「またまたすごいものを発明しました……ってあれ？」

部長室には、いつもこの部屋でタバコをくゆらせながら書類に目を通してはるはずの大和部長の影が無かった。しかし、灰皿の上では、部長が吸っている銘柄のタバコが灰を落としてつつ燃え続けた。

「むむむ……と、いうことは」

敷島は、おもむろに木製の、部長の卓の下を覗き込んだ。

「部長。こんなところで何をなさっておられるんですか？」

果たして、卓のしたに、何かに怯えるようにして丸くなった大和部長がいた。

「……あ、うん、探し物探し物……そう、このボールペン……」

大和部長の手には、会社から支給される安いボールペンがあった。こんなもの、また会社から貰えばいいのに……と訝しんだ敷島だったが、本題を切り出した。

「ええと、実は……」

敷島の言葉を遮って、大和が言った。

「また新たな動力を作り出した、か？」

「はい！」

「やっぱり……」

「と、いうわけで部長……」

先回りして、大和部長は答えた。

「断る！」

「まだ、何も言っていないじゃないですか」

「言わなくても判る！」大和部長は続けた。「新しい動力の、見届け人になつてください” だろう？まったく、毎度毎度のことだから、もう耳タコだよ。でも、その度にワシは口クでもない目を見てるじゃないか。っていうか、前は本当に死ぬかと思つたぞ」

実は前回、大和部長はちよつとした臨死体験をしたのだが、それは“敷島の青い車その2”を参照の事（と宣伝をかましてみる）。

「今度は大丈夫ですよ！それに、前回あれだけの事故を起こしても無事だったのは、僕の発明のおかげですからね」敷島は言った。

「な、なんだと？」

「実は、あの車には、新型のエアバックを着けていたんです。理論上、時速300kmで衝突しても、無傷で生還できるほどのものなんです」

ちなみに、この新エアバック、後に改良が重ねられ、「100Kmでぶつかつても大丈夫！」と、警察から嫌な顔をされそうな売り言葉で販売されることになるのだけれど、それはまた別のお話である。

「ほう、そうだったのか」

「そのエアバックを着けていれば」敷島は言った。「どんな失敗作でも、怪我一つ負いません。なんで、ご安心ください」

「いや、違うだろう」大和は、白髪混じりの頭を掻いた。「そもそも、暴走する危険のない動力を開発してくれないものかね、敷島君？」

「す、すいません」

「まあいい」大和はドアの方に向かった。「ほら、敷島君、試験滑走路だろ？行くぞ」

「え？見てくださるんですか」

「当たり前だ」大和部長は苦笑を浮かべながらも言った。「何度も言うが、部下の作ったものに目を通すのは、上司の務めだからな」

「あ、ありがとうございます！」

「ほら、早く行くぞ」大和はドアを開いた。「午前中までに目を通さないといけない書類が溜まってるんだ」

大和の言う通り、卓の上には、暴力的なくらいにうずたかく書類が盛られていた。

試験滑走路。

やはりいつものように、試験滑走路の真ん中に、青い車が置かれていた。

「あれだな？」

大和が訊くと、敷島は頷いた。

「はい。あれです」

「やはり、外観は只の車だな」

「当たり前ですよ」敷島は言った。「だって、違うのは動力だけですから」

「で？」大和は訊いた。「今回の動力、どういうエネルギーで動くんだ？」

「ああ、お話してませんでしたね。それじゃあ説明しましょう。」

今回使うエネルギーは……人間の“ルサンチマン”の周りに蠢くエネルギーです」

「ル、流刑地マン？新しい戦隊ヒーローものか？」耳が遠いでは済まない大和の空耳であった。

「いえ、違います。ルサンチマン、つまりは怨念、です」

「怨念？」

「はい。人間、長く生きていれば恨みに思うことの一つや二つあるでしょう？」

「ほう、つまりそのエネルギーを使って車を動かすわけだな？」

「はい」敷島は頷いた。

「となれば」大和は言った。「運転席に乗り込むのはワシだな」

「え？なんでです？」

大和は笑った。「実は、ワシってけっこうルサンチマンを抱えた

人間なものでな」

そう言つて車に乗り込もうとする大和に、敷島は声をかけた。

「あ、待つてください!!!」

「ん、何だ？何か？」

敷島は頭を掻いた。「あのう……、いつも“不正がないか”

つて車をお調べになるじゃないですか。あれをやらなくていいんですか？」

「ああ、しまった」

大和部長は、青い車を丹念にチェックしてからその車に乗り込むのだった。

車に乗り込んでから大和は訊いた。

「で、どうやって運転するんだ？」

「ああ、例のごとく……」敷島は後部座席からヘッドギアを持ち出した。「これをかぶってください」

「ふんふん」大和は言われた通り、ヘッドギアをかぶった。

「で……」

「サイドブレーキを外して、ギアをドライブに入れるんだろう？」

先回りして、大和は一連の動作を行った。

「じゃあ、“ルサンチマン”を思い浮かべてください」

「ああ」

大和部長は、長年胸に溜めているルサンチマンを思い浮かべた。

そのルサンチマンの元は、妻だ。と、心の中で大和は呟いた。

妻は前の前の部長の娘だ。要は逆玉の輿に乗ったと言つてもいいけれど……、その妻が問題なのだ。

妻は、きつちりしすぎています。一流企業の部長の娘で、今は一流企業の部長の妻なのだから少しくらい金使いが荒くても良さそうなものだ。なのに、どうしたわけか妻は - 有り体に言えば - ケチなのだ。

まあ、それならいい。けれど……。

妻は、夫に、つまりワシに持たせるお小遣いも、異様にケチるの

だ。

だって、訊いておくれよ。部長のワシが、月に1万だよ？部長、
っていうポストは何かと付き合いが多いし、何かと入用なのだ。一
万円、なんて、それこそ一週間もせずに使ってしまうよ、普通。

「うおー！お小遣い上げるおー！！」思わずルサンチマンを口
に出してしまふ大和部長。

その瞬間だった。

青い車が動きだした。

「おお、スムーズな発進ですね」のんきに独身貴族・敷島は言っ
た。

「オオ！！せめて小遣いを倍の二万に上げる！！」

低い野望ですね、大和部長。

それはさておき、まるで、大和部長の叫びに呼応するように、青
い車はものすごい勢いで前に進み続ける。

「おお、スムーズな加速。これなら実用化出来そうですね」助
手席に座る敷島は、ちよつと興奮気味に訊いた。

「……うん。確かに、この発進、加速。まったく問題ないよ
ちよつど、そんな話をしていた頃だった。

ピリリリリ！！

「ああ、電話だ。失礼」大和の携帯電話だったようだ。大和は青
い車を試験滑走路のトラックの路肩に停めると、携帯電話を懐から
取り出した。

「もしもし。大和ですが………つて何だ、お前か。どうし
た、仕事中だぞ、つて………な、なんだとう！！お前、それ
本当か！？え、それも本当か！？やった！！………うん、詳しい
話はあとで。じゃあな」

大和は、携帯電話のボタンを押し、懐にしまった。

「ど、どうしたんですか」怪訝な顔をして訊く敷島。

「い、いや、あ、あのな………」明らかにろれつが回って
いない大和。

「どうしたんですか、そんなに慌てて」

「実はな……今の電話、妻からだっただけだな……妻が買っていた宝くじが、当たったそうなんだ」

「え、いかほど？」

「ああ、500万円だそうだ」

「500万円!?」敷島は自分の年収よりも大きな額に、目を白黒させた。

「ああ、しかも、実は我が家、今まったくローンがないんだ。それに、最近車を買ったばかりだから、別に欲しいものもないそうだ。そこで……」

「そこで？」

「ワシのお小遣いUPだそうだ!!やった!!」

「おお、おめでとうございます!!!で、それはさておき」

「そうだったな、車の試乗中だったな。よし、発進するか……」

ところが、このあと、車はピクリとも動かなかった。ギアを入れていないんじゃないか?という疑惑もあったのだが、やはりギアを入れなおしてもなお動かなかった。

「っていうか、エンジンが回ってないじゃないか」とは大和部長の弁である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0797d/>

敷島の青い車その3

2010年10月18日10時24分発行